

～ 母性看護専門看護師の役割と活動 ～

初めまして。本院中央病棟3階・MFICUに勤務しております本末 舞と申します。皆さん、母性看護専門看護師（Women's Health Nursing Certified Nurse Specialist）をご存じでしょうか。母性看護CNSは、周産期の母子および家族への支援だけでなく、女性のライフサイクル全般にわたる健康への援助を行います。疾患や年齢に限定されることなく、この世に生を受けてから亡くなるまでの女性の一生を支援するという特徴を持っています。そのため、産科に特化したものではなく多くの領域に関連しています。

母性看護CNSは、2003年に認定が開始され全国に89名（2022年11月現在）の仲間がいます。他領域に比べると大変少なく、また、母性看護CNSにしかできないことは法律上存在しません。だからこそ、母性看護CNSにできることを日々模索しながら過ごしています。コロナ禍では、立ち会い分娩が行えないこと、感染予防の観点からご家族の支援が十分に受けられないことなどから、産後うつが増加することが見込まれました。そのため、産後の女性に電話訪問を行い産後うつを予防したり、COVID-19陽性により母子分離となり育児練習が困難となった事例には、助産師による既存の外来を形を変えて活用するなど、多職種の理解と協力を得て小さいながらも意識改革に取り組んできました。



スタッフとの計画立案

また、日頃はスタッフナースとして勤務していることによる強みもあります。患者の生の声を元に、スタッフと共に看護計画を立案・実施・評価し、院内の研修課題に取り組む等、実践と教育を同時に実施していくことができます。看護の成果をスタッフと一緒に見ることができ、さらにスタッフの変化や成長も感じることができます。

しかし、CNSとしては看護を円環させていくことも必要だと感じています。臨床で勤務していて、研究を少しおっくうに感じている方はいませんか？研究は、臨床課題から生まれ、私たちの周りには山のように研究テーマが溢れています。また、研究を通して自己をリフレクションする機会にもつながり、患者さんとのコミュニケーションの手がかりに気付くこともでき、一石何鳥にもなると感じています。さらに、研究発表により当院の素晴らしい看護を知ってもらえる機会につながります。スタッフが少し健遠してしまい

がちなことを率先して行い、実践と研究を循環させ活用していくこともCNSの役割だと考えています。その中でも私は、先天性心疾患のある母と子のケアに力を注いでいます。

さらに、私が看護を行う上で大切にしていることがあります。それは、根拠に基づいた実践（Evidence-Based Practice：EBP）です。EBPに基づき「看護の中心は患者であるという軸をブレさせない」こと、「見極め」を行うことを常に意識しています。それにより、どんなに困難な事例でも寄り添う姿勢を持ちつつ、思考の偏りを防ぎ判断を行うよう心がけています。

CNSとして課題は山積しており、孤独感や悩みを感じる場面も多々あります。しかし、当院にはたくさんのスペシャリストの方々がいるため、皆さんに支えていただいた結果今があります。そして、何より部署のスタッフや上司の理解と協力があってこそ役割が発揮できると感じています。母性看護分野の発展に向けて何ができるのか、何をすべきなのか、皆さまのお力を得ながら看護の力を発揮できればと思っています。今後とも、よろしくお願いします。



病棟での勉強会